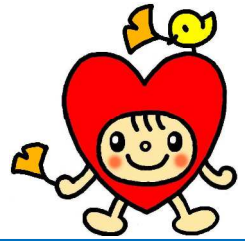




2018年

人権一口講座



親のおもい

某携帯会社のCMで「三太郎」シリーズがありますが、とてもユニークでいつも楽しみにしています。最近のCMでは浦島太郎の名前をつけるエピソードが流れています。その中で浦島太郎の父がいろいろ願いを込めて名前を考えているところに、母が「太郎！いいのよ、名前にいろいろ込めなくても。元気でさえいてくれたら。」というセリフがあり、その言葉がとても心にぐつとくるものがありました。

子どもが生まれたころは、笑った、寝返りした、言葉を覚えたなど少しの成長も見逃さず、喜んでいたものでした。しかし、少しずつ大きくなるにつれ、立てば、いつ歩くだろうかなど、次の成長を期待しすぎてしまいます。学校に行くころになるとほかの子とつい比較してしまふあまり、「できてほしいからできるのが当たり前」になり、その子なりの少しの成長を見逃してきたような気がします。

子どもの宿題を見ていて、書いている字が汚ければ、「いつい小言を言いながら消して書き直しをさせることがよくあります。子どもにして見れば、「読めなくもないのに」と思っているのではあるが、親としてみれば将来困らないようにと思ってしまう。子どもたちのために良かれと思っしていることが、かえって子どもの自信を失わせ、劣等感をもたせる結果となっていることが多々あるような気がします。「高校生の生活と意識に関する調査」では、日本の子どもたちは自己肯定感（自分に対する肯定する意識）がほかの諸外国の子どもたちに比べ低いという結果がでています。出るくいは打たれるではないですが、日本では他の人に迷惑がかからないように、他の子と違わないようにということに気をとられるあまりに、子どもたちを認め、励まし、褒めることがあるそかになってしまっているのかもしれない。全国学力状況調査の結果では、自己肯定感が低いと学力や達成感・意欲などの意識、規範意識が低くなるという結果も出ています。

浦島太郎のお母さんの言葉ではないですが、「たとえ、子どもが運動会で一着になろうがビリだろうが、あなたのことが大好きなのはかわらない。」「学校の成績が一番だろうがビリだろうが、私にとっては世界で一番かけがえのない子ども。あなたもこの世に生を受けてくれただけで私は最高だから。」「こつこつとした気持ちで子どもと向き合っていくことが、子どもたちの可能性を大きく伸ばし、子どもの幸せにつながるのではないだろうか。」



（熊本市ふれあい文化センター広報紙「かけはし」十月号より）

短いメッセージ 長くてつかれる いつもの帰り道
友だちと帰ると楽しいよ ふしぎだな

熊本市・熊本市教育委員会・熊本市人権啓発市民協議会のカレンダー- 城南小学校 4年 上野 倫太郎さんの作品より